2つの一人旅　2年－鈴木 道夫

人間、やる気のないものは、しょせん〜をやるぞと決心したところで睡眠を優先させてしまうものだ。最近つくずくそう思う。ぼくは、高校時代は数学の問題を解くことに生き甲斐を感じていたが、大学に入ってからはサイクリング…そして最近はサイクリングにこだわることなく、自分の足で行く『旅』というものに生き甲斐を感じている。そこで、今回は今年(後半)あまり活発に参加しなかったクラブ活動（これに関しては色々と書きたいことはあるが…）について書くよりも、今年行った2つの一人旅について書くことにする。

…夏…部屋に閉じこもっているなんて…若者ではない。

まず、夏休み（というより、前期）をかけて行った東北・北海道への一人旅……このサイクリングに行くことは、既に春休みが終わった時、決定していた。そして夏休みが始まるまで、いつもこのことばかり考えていた。どうしてあんなに一生懸命になっていたのか、今考えると良くわからないが、いずれにせよ、自分の求めるサイクリングはこれだ。そして、それは今回やらなければならないことだ。と確信していたし、今でもそう思っている。クラブ行事の夏合宿をすっぽかして行ったことは、部員、そして両親の反対などもあり、大変心が痛んだが、その確信が、決局は、このサイクリングを優先させた。さて、このサイクリングだが、7月9日の午後、胸はずませて出発してから、約

40日間、随分色々なことがあった。そして、その一つ一つがぼくのこれからの生き方に影響してくるものである。長い旅の間、色々な人々に出会った。そして、その一人一人が個性を持っている。色々な生き方をしている。こんな人もいたのか。と思うような人もいれば、どこにでもいるような人もいる。一人で行ったから、すぐに、そういった人々と打ち解け合うことが出来た。そして、昔は、人間が嫌いだったが、だんだん好きになってきた。この人間嫌いの思想からの脱皮(?)は、今後、ぼくの生き方に大きく影響するだろう。

それから、長い旅だから、色々なところを、色々な状態で走り、そして歩き、とどまった。そしてそれにより、一層自然というものに触れられた。ぼくは自然を、そして、女を愛したい。しかし、ただそう思っているだけではどうにもならない。(このことは、工大祭で田尻さんの話しを聞いて一層そう思ったのだが…) ただあこがれだけで終わるのではだめだ。やはり、太陽の下、そして雨の中を…大自然の中で喜こびを感じ、苦しみを感じ、ときにはいじけ、そしてときには無感動な状態になっても、その中で、直接それを肌で感じることにより、始めて愛せるのではないかと思う。この旅によって自然というものに対する感じ方も大きく変わったと思う。また、それに関連して、この旅で、完全に登山の味をしめてしまった。やはり、人間、己分の足で一歩一歩進むのがいい。(登山に限らず) 大雪山、そし

て、雌阿寒岳、阿寒富士への登山は、ぼくの登山の第一歩として大変ふさわしく、有意義なものであった。そして野付半島を歩いたことも。

そして、秋休みには大杉谷…… これが今年2つ目の一人旅である。大杉谷に秋休みを利用し行くことも、春休みの後半、既に決定していた。（その後、色々と決心が変わったが、結局…）

実は、大杉谷には、今年の春、行くつもりだったのである。それが、色々と事情（accidentと雨）があり行けなかった。しかし、春合宿で大杉谷一本で、素晴らしい旅をした人達がいた。彼らの話しを聞くと、もう行かないわけにはいかなくなった。好条件が重なっていれば、ぼくと曽我部の方が先に大杉谷に行っていたのである。（そういった意味でも、曽我部、そして都合で好天候の中を涙を呑み、大杉谷班と別れた名取さんには、是非行ってもらいたい。）彼らの大杉谷との出会いも素晴らしいものであったが、ぼくも、大杉谷と素晴らしい出会いが出来た。雨の中を、暗闇の中を、朝4時半に孫松の家を出発した。「5段変速自家発電」（高校の時に通学用に利用していた。）号はひたすら大杉谷を目ざして走った。やがて明るくなり、そしてフェリーで海を越え、ひたすら走った。やがて雨も止み、雲も消えてきた。紀伊半島を走るのは春以来であるが、どうやら紀伊半島の感じがつかめてきた。（そして今回の旅で、一層愛着がわいた。）平和な山間の村にも開発の手は押びてきている。それは、無くてはならないものだ。しか

し、いつまでも静かであってほしいと望んでしまう。やがて宮川は谷間を流れるようになってきた。そして大杉谷部落がそこにある。（昔は宮川貯水池もなく、滝と渓谷とが互いに連なり合いながら延々40kmにわたって峡谷美をほこっていた。）大杉谷は静かな谷間の部落である。一日のうち陽のあたるのは一体どのくらいだろうか。我々は、たまに旅行に行くだけであるが、そこの人々は、毎日、そこで暮らしているのである。ぼくは暗くなってきた頃、桧原というところの西村屋旅館に宿を決めた。ここからなら宮川湖も、その先にある登山口もそう遠くはない。西村屋旅館では、夜、隣りの部屋の人達が酒を呑んで騒いだ。なかなか眠れず、窓を開け、空を眺めた。すると、谷間に星が輝やいていた。明日は晴れだ。雨の中を走ってきて好かった。と、思った。

次の日は、ほどよい頃起きて快調に出発した。もう野原には太陽がいっぱいの時間なのに、大杉谷には、山と山との隙き間から光線が円錐を作っているだけだ。そしてその光が、とてもありがたく思う。川の上にはsmoke on the water，そんな冷たい空気の中をえっちら、ほっちら走ってゆく。冷たさと静けさが一緒になるとすがすがしさを与え、そこに光が射すと静かな喜こびを与える。そんな中を、車が走って行った。そして静けさにあらためて気付いた。やがて宮川湖に着き走って行くと、だんだん見覚えのあるところに近ずいてきた。（実は、今走ってきたところだって、ずっと春休みに曽我部と一緒に走っているのだ。）それは、船着

き場の売店であり、新大杉橋である。ぼくは春のことを思い出し立ち止まった。やがて登山口に着き、発電所に自転車を預け、歩きはじめた。大杉峡谷は、思っていたより明るかった。それは天気だったせいもあるだろうが。水が青く澄んでいる。そして岩に砕け、白くなる。谷にももう太陽が照っている。思ったより暑い。夏と秋の中間のようだ。ぼくは滝があるたびに水を呑んだ。全く気付かうことなく。山のてっぺんから水が落ってこちてきているような千尋谷……以下詳しく書いていったら切りがない。

平等岩というところで昼寝をし、弁当を食ってから桃木小屋へと向かった。桃木小屋、そしてそこのおばあちゃんの話しは、春合宿-大杉谷班の人達から何度も聞いていたのでとても楽しみだった。木間に川を隔てて、思ってたよりずっと立派な小屋(というより山の家)が見え、その前に吊り橋がかかっていた。吊り橋には洗濯物が干してある。吊り橋を渡り行くと、石段のところに、おばあちゃんが立っていた。これがおばあちゃんとの初めての出会いである。思っていたとおりのいい人で、思っていたよりずっと元気であった。そして古木たちのことを大変良く覚えており、よろしくと言っていた。この先、まだ書きたいことが一杯あるが、一体何枚になるかわからなくなってきたのでこの辺にしておく。

(以上、題して、大杉谷との出会い-前半-)

最後にふたこと…「大杉谷に行こう。」「ゴミは持ち帰ろう。」